

ネイチャーゲームの普及と 指導者養成に関する一考察（２）

○降旗信一（日本ネイチャーゲーム協会）

大島順子（日本体育大学、日本ネイチャーゲーム協会）

ネイチャーゲーム 指導者養成 全国一斉大会

1. はじめに

筆者らは、第22回大会にて、「ネイチャーゲームの普及と指導者養成に関する一考察」として、ネイチャーゲームの普及の基本方針、ネイチャーゲーム指導員の養成、単位制度、知的所有権に関する問題点等に関する報告を行った。前回発表でも述べたように1979年で米国で発表されたネイチャーゲームは、わが国では1990年より本格的な普及がスタートしたばかりであり、新しい野外活動プログラムとして、現在、急速に国内に広がりつつあるが、指導者養成をはじめとする普及の方法については未だ試行錯誤の段階である。しかし、ネイチャーゲームの普及の現状および問題点について、この分野の研究者の皆様に途中経過をご報告し、ご助言、ご批判を仰ぐことは、プログラムの普及に直接携わっているものとしての責務であると考え、発表させていただくこととした。

2. ネイチャーゲーム普及の現状

1990年よりスタートしたネイチャーゲーム初級指導員養成講座は、ほぼ全国的に実施されており、講座を修了して指導員登録をした者は、平成5年8月15日現在で初級指導員1961名、中級指導員32名、上級指導員3名である。また、これらの指導者とは別に、一般個人会員が291名、一般家族会員が167家族である。なお、平成5年度より講座最終日に筆記試験が課せられるようになったが、この検定は、講座の講義内容から出題されるため、現在の合格率は98%である。また、平成5年3月には、初めて登録の更新が行われたが、640名の更新対象者に対し、更新率は約80%にとどまった。但し、未更新者のうち3割程度は、転居などで現住所が不明の方である。

3. 指導者養成に関する制度

ネイチャーゲームの指導者養成は、以下のような制度に基づき進められている。なお、これらは、いずれもネイチャーゲームの理念と技術を正しく普及し、その質的な保護をはかりながら、普及を促進するために制定されているものであり、無意味に指導員の活動を制限しているものではない。

（１）指導員養成講座および研修講座

20時間のカリキュラムでネイチャーゲームの理論と手法を学習する初級指導員養成講座をはじめとし、指導者の段階に応じた養成講座と、指導員登録後のフォローアップ研修としての研修講座がある。

（２）指導員の登録

所定の講座を修了したものは、所定の単位を取得し、取得単位に応じた指導員登録をすることができる。登録は2年単位となっている。

(3) 指導員ハンドブック

所定の教育課程を修了し、必要な審査に合格した上で、指導員登録をされた方には、指導員必携の指導マニュアルとして、当協会の発行する指導員ハンドブックが頒布されている。

(4) 指導員倫理基準

すべての指導員登録者に対して、有資格者としての社会的立場上の責任ある行動を求めており、その行動規範として「ネイチャーゲーム指導員倫理基準」を制定している。

(5) 実践報告書

登録指導員に頒布される指導員ハンドブックには、巻末に実践報告書の様式が添付されており、これにより各地での実践報告を求めている。この報告書提出の目的は、①本人の地域実践活動への単位認定を与える、②全国から集められた実践データを集積して新しいノウハウを開発し指導員にフィードバックする、ことの2点である。

(6) 引用承認手続き

ネイチャーゲームの理念と手法を全国一定のものとして普及するため、現在、公表されている67のネイチャーゲームにつき、その手法を書籍・雑誌・会報などで紹介する場合、協会所定の引用申請書による手続きを行っていただくことを指導員および関係各方面にお願いしている。申請は、無料で用紙を提出していただくだけの簡素なものである。平成3年7月より平成5年5月まで101件の申請が行われ、全て承認されている。

(7) ロゴマーク

「ネイチャーゲーム」は、既に登録済の商標であるが、一定の基準を満たした行事名称、団体名称、教材、印刷物などに関して使用許可申請のあった場合には、使用を認めており、その証として右のロゴマークを発行している。



(8) 中・上級指導員委託契約

ネイチャーゲーム中・上級指導員は、協会より普及活動を委託されたインストラクターと位置付けられており、相応の権利義務の関係を契約書として交わしている。中・上級指導員の主な権利は、一定の範囲でネイチャーゲームの指導に関する金員を徴収できることであり、主な義務は、講師としての責任ある態度や、指導力維持のための研修会出席および活動報告などである。

4. 全国一斉親子で楽しむネイチャーゲーム大会と日本ネイチャーゲーム協会

昨年10月25日に「全国一斉・第一回親子で楽しむネイチャーゲーム大会」（日本ネイチャーゲーム協会、(財)日本レクリエーション協会主催、文部省、建設省、環境庁、林野庁など後援）が実施された。この大会は、主に親子などの家族連れを対象に北海道から鹿児島まで全国20か所で開催され、「クウモリとガ」「私はだれでしょう」「音いくつ」「宝さがし」という4つのゲームを全国一斉で同時時間帯に実施した。なお、この大会の参加者総数は、1492名、指導者総数は263名であった。

また、この大会以降、各地の指導員より、継続的なネイチャーゲームの地域活動を望む声が高まり、地域の指導者有志の集まりとして「地域ネイチャーゲームの会」がスタートし、本年度は、29の会が活動を開始している。さらに、こうした動きに合わせて、本年5月には、ネイチャーゲームの全国的な普及団体として日本ネイチャーゲーム協

会が設立された。この団体は、「野外活動としてのネイチャーゲームの普及および調査研究を行い、余暇をはじめとする様々な国民生活の場における自然とのふれあいを促進し、もって国民の心身の健全な発達に寄与すること」を目的にしている。

5. 全国一斉大会のアンケートの結果と考察

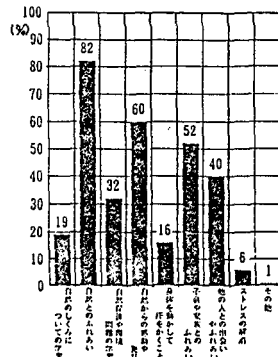
全国一斉大会の終了後、ネイチャーゲームへの期待を探る目的から大会参加者および指導員に対してアンケート調査を行った。この調査は、参加者者200名（各会場男女各5名）、指導員100名（各会場5名）を無作為に抽出し、大会終了1カ月後の平成4年11月中旬から12月下旬にかけてダイレクトメールを送付して実施した。この結果、参加者アンケート129通（回答率65%）、指導員アンケート63通（回答率63%）の回答を得た。

(1) 参加者アンケートの結果と考察

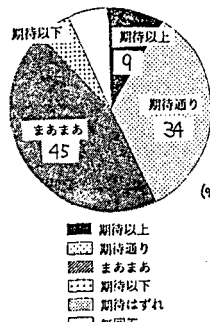
参加者が、この大会に期待していたこと（図1）は、第一に「自然とのふれあい」（82%）であり、続いて「自然からの感動や発見」（65%）、さらに「子供や家族とのふれあい」（52%）であった。「自然とのふれあい」とは、五感など自分の感覚で直接自然を感じることであり、その結果として、みじかな自然のなかにも感動や発見を見いだすことができる。また、こうした体験を家族や親子で共有できる機会が日常生活の中で少ないことが、本大会に「子供や家族とのふれあい」を求める声の背景にあると考えられる。アンケートの自由回答欄にも「子供の意外な一面を発見した」「久々に家族で楽しいひとときを過ごせた」といった意見が寄せられた。

さて、こうした参加者の期待に対して、本大会への期待実現度（満足度）を示したものが図2である。この結果は、「期待以上」「期待どおり」を合わせても5割に達しておらず、かなり厳しい評価が寄せられたといえる。その最大の理由としては、第一回大会のため、スタッフの大半が、こうした行事への経験が不足しており、運営、指導の両面での未熟さが原因ではないかと考えられる。

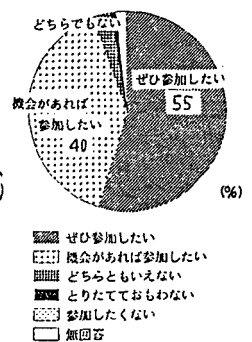
このような厳しい評価にもかかわらず、次回以降の参加意欲（図3）については、「ぜひ参加したい」「機会があれば参加したい」を合わせて95%の人が参加意欲を示しており、今後の期待には大変高いものがある、これは、今大会のように親子でみじかな自然とふれあう機会が減少しつつあることが背景であろう。その意味で、本大会のような場合は、今後益々必要であり、今回は、今後の普及活動の発展に向けての第一歩を踏み出したといえるだろう。



大会参加への期待 (図1)



期待の実現 (図2)



次回大会への参加 (図3)

(2) 指導員アンケートより

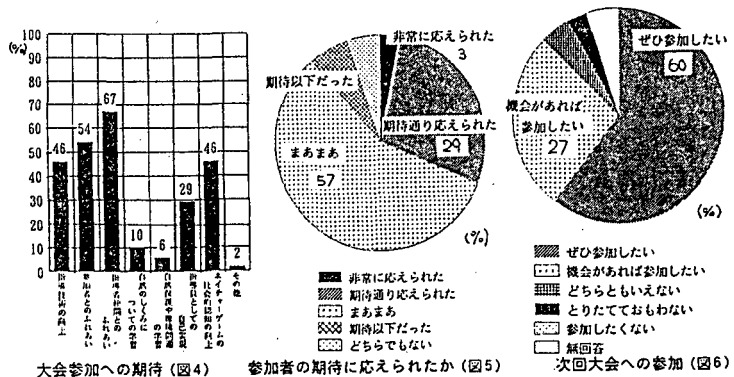
地域でのネイチャーゲーム活動が発展するためには、指導員の質的量的向上が不可欠である。その意味では、本大会は、ネイチャーゲーム指導員が、はじめて本格的な指導

の場を得ることができた機会と位置づけることができる。そこで次に指導員のアンケートに着目してみたい。

まず、指導員が、この大会に期待していた内容(図4)は、第一に「指導者仲間とのふれあい」(67%)であり、ついで「参加者とのふれあい」(54%)、さらに「指導技術の向上」「ネイチャーゲームの社会的認知の向上」(いずれも46%)となっている。本大会の以前は、地域の指導員同士が顔を合わせるといった機会も少なかったため、今大会では、そうした仲間づくりが一番の期待となったのだろう。また、指導員の大半が、ネイチャーゲームに対する親子の関心の程度や内容については十分に認識しておらず、今大会でこれほど多くの参加者が集まったことも予想外だったのではないだろうか。指導員本来の課題である「指導技術の向上」と同程度に「社会的認知」が期待された理由も、その点にあると推察される。

図5は、指導員の自己評価であるが、ここでは「参加者の期待に応えられた」と回答している指導員は、3割強しかない。「まあまあ」との回答が57%あるが、この結果は、まだ参加者から何がどの程度期待されているのかもよくわからず客観的な自己評価も難しいといった現状を表しているのではないだろうか。ただ、今回が、全くの初めてであったことを考えれば、この結果は無理もないといえるかもしれない。

図6は、今後へのスタッフとしての参加意欲であるが、87%が「参加したい」と回答している。「どちらともいえない」「とりたてて参加したいと思わない」という人でも、自由回答欄には、「指導員としての能力が、まだ十分に備わっていないため」などと記入している例があった。こうしたことから、今大会は、指導員養成講座を受講して指導員資格を取得した人々が、あらためて地域の指導者として実践を行い、自分たちに期待されている役割を認識した場であったといえるだろう。指導員にとって、今大会の成果は、今後、継続的な地域での活動が実践できるか否かにかかっているといえよう。



6. 現状の問題点と今後の課題

現在、指導員から寄せられる最大の悩みは「せっかく資格をとってもネイチャーゲームを指導する機会がない」という点であり、これについては、現在、前述の「地域ネイチャーゲームの会」の効力を見守っている所である。また、同じネイチャーゲームを実践するにも学校の生活科、地域の子供会、養護施設での活動等々、それぞれの対象者や状況に応じた実践が求められるため、こうした実践の場に応じた情報提供が求められているのだが、現在は、まだ、そこまでのきめ細かな対応が十分とはいえない。さらに、新しいプログラムの開発なども、今後の課題といえよう。今後、これまでの状況を分析しつつ、以上のような課題に取り組みたいと考えている。